

## 母性看護学教育でのディベート学習の試みとその評価

### — 学生による質問紙調査より —

中尾 優子<sup>1)</sup>, 吉留 厚子<sup>1)</sup>, 井上 尚美<sup>1)</sup>, 高田 久美子<sup>1)</sup>, 藤野 敏則<sup>1)</sup>, 若松 美貴代<sup>1)</sup>

**要旨** 母性看護学教育にディベート学習を導入し、学生による質問紙調査によるディベート学習方法の評価を行った。結果、学生のほとんどがディベートを成功したと感じ、8割以上が講義への導入に賛成していた。その背景には、ディベートとして形式が成立していたことや能動的体験ができたことが考えられた。さらなる改善としては、少人数制のディベート方法の実施や準備性の工夫が必要であることが明らかとなった。

**キーワード:** ディベート, 母性看護学, アクティブ・ラーニング, 母乳

#### I. はじめに

大学への入学とともに、「生徒」は「学生」になり、「批判的思考力」「論理的な思考力」「迅速な思考力」といった考える力が重要視される。これらの「考える力」は他者との議論の過程において必要不可欠であり、かつ議論する過程で養われることを松本らは、説いている<sup>1)</sup>。また、未来の知識、未見の知識を創造するためには、過去の知識量の優劣を競う偏差値教育、知識中心教育からはやく脱皮する必要があると北岡は述べており、意思決定能力を重要視した意思決定ディベートの技術取得を勧めている<sup>2)</sup>。

大学教育改革において、自ら考え学ぶ姿勢を重視した受動的から能動的な授業形態への変換とし、アクティブ・ラーニング (AL) を取り入れたアクティブ化が進められている。本大学でもアクティブ・ラーニングプラザが2015年7月に教育学部に完成し、10月より学生のグループ・ディスカッション、ディベート、グループワークの場として、ハード面でその体制が整えられ<sup>3)</sup>、組織的・体系的なアクティブ・ラーニングを目指した大学全体でのFD活動が盛んに行われている<sup>4)</sup>。

日本国内の看護教育におけるディベート教育は、宮里

らは文献検討の中で、一般教育/教養の学問分野でディベートを含めたアクティブ・ラーニングが取り込まれ、看護の専門科目でのディベートの取り組みが少ないことを指摘している<sup>5)</sup>。今回、本保健学科看護学専攻母性看護学において、専門教育科目の中の講義にディベートを取り入れ、学生による質問紙調査からディベート学習方法の評価とその課題を明らかにした。

#### II. 調査方法

##### 1) 対象

母性の専門科目、母性ケア論 のディベート講義に参加した3年生76名

##### 2) 調査日

平成27年7月1日

##### 3) データ収集方法

ディベート実施後に、学生へディベート学習の内容(事前学習時間、学習方法)、ディベート参加の思い(負担感、満足感)、ディベートの受けとめ方(講義への導入、成功の有無)について質問紙調査を行った。ディベ

<sup>1)</sup>鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻

連絡先: 中尾優子

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax : 099-275-6350

E-mail: ynakao@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

ト参加の負担感の選択肢は、かなり負担であった 少し負担であった 負担はなかったとした。ディベート参加への満足感は、大満足 満足 やや満足 不満とした。ディベートの受けとめ方の講義への導入（このような講義形態は講義の中で取り入れた方がよいか）についてと今回のディベートの成功の有無（今回のディベートは成功したと思うか）についての選択肢としては、強くそう思う そう思う 思わないとした。さらに、それぞれの設問の選択肢を選んだ理由を自由に記載してもらうことを依頼した。

#### 4) 倫理的配慮

質問紙は無記名とし、個人が特定されないこと、授業評価へは関係がないことを説明した。調査結果は学術的報告以外には用いないことを口頭で話し、発表の許可を得た。また、質問紙への記入は自由意思とし、提出をもって調査への参加の同意となることを説明した。

### Ⅲ. ディベートの実際

#### 1. 看護専門教育科目の母性看護学の中でのディベートの位置

現在の本大学でのカリキュラムは2年生の前期で母性看護学概論、後期で母性のフィジカルアセスメント、その後、3年生の前期で母性ケア論・ を開講し、後期にローテーション看護学実習、母性看護学実習を行っている（図1）。母性ケア論・ においては周産期の妊

婦、産婦、褥婦、新生児の健康と看護について主体的に学習することを目的にしており、母性ケア論 においては、特に産褥と新生児に焦点をあてている（表1）。学習目標は、褥婦・新生児の看護アセスメントの理解と技術の習得であり、さらに主体的に学んだ母性ケアについて、熟考し、発表することができることを重要視している。授業の組み立てとしては、褥婦の看護アセスメントの理解である褥婦の進行性変化について、母乳栄養の長所と考えておかなければならない点を自ら学ぶために4回目で課題学習時間を用意し、5回目にディベート発表を行い、6回目にディベート発表内容を展開させた講義内容の工夫を行った。

#### 2. ディベートの展開

##### 1) 実施までの準備

第1回授業時に、ディベートの講義方法について説明を行い、テーマについては事前に示した。今回のテーマは、「子どもは必ず母乳で育てられるべし。是か否か。」であった。学生を学籍番号で2分し、是か否かの選択権を代表者により決定した。発表当日に学生一人一人が是側で討論代表になるのか、否側で討論代表になるのかを明確にした。司会者と代表討論者については、発表までに希望者を募った。中学、高校でのディベート経験者は2割程度であった（挙手）。

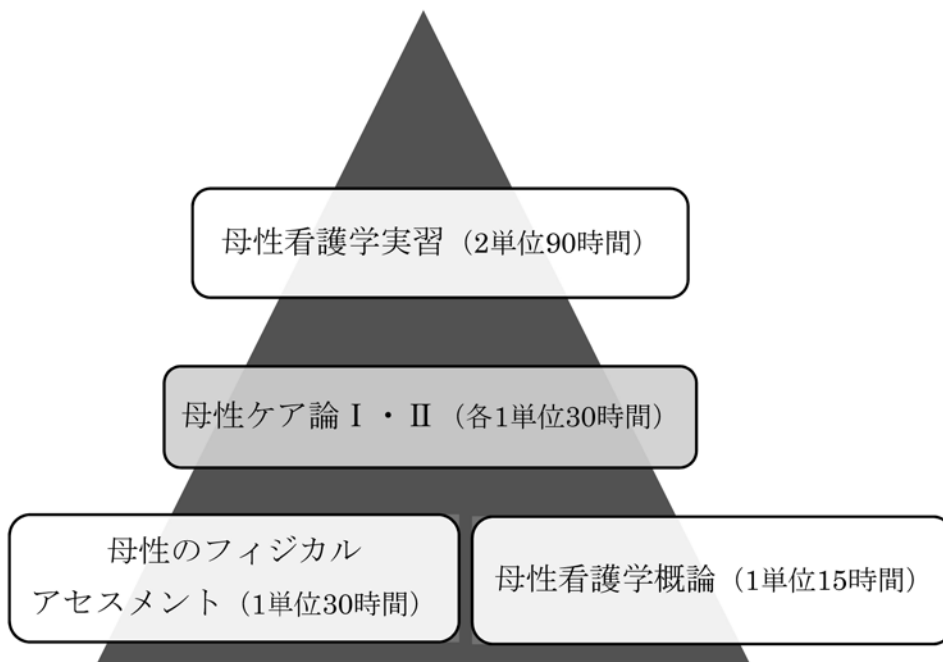


図1. 母性看護学（専門科目）の積み上げ

表 1. 母性ケア論Ⅱ

回	学習課題	学習の内容並びに方法
1	褥婦の看護 (1)	授業展開方法・褥婦の理解とヘルスアセスメント
2	褥婦の看護 (2)	心理・社会的な変化への援助・退院後の援助
3	ハイリスク褥婦	ハイリスク褥婦の看護
4	褥婦の看護 (3)	演習 1: 母乳栄養について (課題学習)
5	褥婦の看護 (4)	演習 1: 母乳栄養について (発表) デイバート
6	褥婦の看護 (5)	乳房管理 (主に産褥)
7	新生児 (1)	新生児の理解とヘルスアセスメント, 出生後の生理的 適応 と新生児の正常な経過, 正常に経過するための看護
8	新生児 (2)	ハイリスク特に低出生体重児と看護
9	母性看護に特有な看護技術(1)	演習 2: レオポルド触診法・胎児心音聴取 (モニター, ドップ ラー法), 妊婦・褥婦健康診査, 沐浴, 新生児の保育 (衣服 の着脱, 抱き方)
10	母性看護に特有な看護技術(2)	
11	看護過程の展開(1)	演習 3: paper patient による看護の展開 (異常編)
12	看護過程の展開(2)	
13	母性看護に特有な看護技術(3)	演習 2: レオポルド触診法・胎児心音聴取 (モニター, ドップ ラー法), 妊婦・褥婦健康診査, 沐浴, 新生児の保育 (衣服 の着脱, 抱き方)
14	母性看護に特有な看護技術(4)	
15	母性ケア論総集	まとめ
16	試験	試験

## 2) 実施

討論者代表, 是側 5 名, 否側 5 名を決定し (学生からの希望者はなかった), 授業開始 40 分後からのディベート開始に合わせ, 打ち合わせ時間を確保した。開始までの時間に, 司会 (1 名), メイン審査員 (5 名) との打ち合わせを行い, 会場準備は全員で行った。タイムキーパー (2 名) は, 大学院生 (助産コース) が実施した。実際の順序は以下の内容で行った。

### 是側の基本討論

(1 名が代表で行う。2 分以上 3 分以内)

### 否側の基本討論

(1 名が代表で行う。2 分以上 3 分以内)

### 作戦タイム (2 分)

### 否側の交互討論

(挙手し, 司会が当てた時 1 名のみ発言ができる)

### 是側の交互討論

(挙手し, 司会が当てた時 1 名のみ発言ができる)

以後, と を繰り返し, 是側で終わる。

### (交互討論 14 分)

### 作戦タイム

### 是側の最終討論

(1 名が代表で行う。1 分以上 2 分以内)

### 否側の最終討論

(1 名が代表で行う。1 分以上 2 分以内)

### 審査・講評

ディベートの審査は, メイン審査員一人の持ち点を 20

点（基本討論3点・交互討論14点・最終討論3点）、その他の審査員の持ち点を2点とし、全員参加とした。審査の基準は、『基本討論においては、是・否側のメリットやデメリットとその理由が明確に述べられているか。』『交互討論においては、論旨が明確で相手に対して説得力があるか。相手の主張のおかしいところを指摘しつつ自分たちの考え方の正しさを主張できるか。チームの仲間で助け合い、積極的に反論しているか。説得力が大きいか。』『最終討論では、交互討論をふまえ、是・否側の立場およびその理由が明確に述べられているか』とした。メイン審査員、会場のその他の審査員、大学院生（5名）、教員からの論評を行い、開始から40分で終了した。

今回は、母乳とミルクの栄養の相違、乳房トラブルとその対処、母乳感染、母児の心理面、授乳環境の5つがおもな論点としてあがり、結果はメイン審査員の持ち点と合わせは側100点、否側130点となり、否側の勝利で終わった。

#### IV. 学生の評価

ディベート参加者76名中、73名が質問紙を回答し、有効回答であった72名（94.7%）を最終調査対象とした。

##### 1. ディベートの準備と負担感

事前学習時間は、2.3時間（SD1.6）で、最小は0.6時間（10分）、最大は10時間であった。学習方法については複数回答で尋ね、書物42(57.5%)、人に尋ねた14(19.2%)、新聞5(6.8%)、インターネット57(78.1%)、その他6(8.2%)であった。負担感については、かなり負担であった4名(5.6%)、少し負担であった51名(70.8%)であった。負担はなかったは、17名(23.6%)であった。負担感の主な理由としては「同時期に課題やレポート提出が重なった」であった。

##### 2. 参加満足度

ディベート学習に参加しての満足度は、大いに満足6

名(8.3%)、満足50名(69.4%)であった。大満足の理由は、「(調べる内容)が将来自分のためになる」「発表者の体験ができた」「活発な意見交換がみられた」、満足の理由は、「(是側、否側)それぞれの意見がブレていなかった」「さまざまな人の意見を聴くことができた」「考えを深めることができた」「論点が明確であり、自分の考えを再考できた」と述べていた。やや不満は、12名(16.7%)であり、その理由として、「メリット、デメリットのまとめ方をもう少し上手にしてほしかった」「役に立つ意見が少なかった」「自分が反論できると感じた時、もやもやした気持ちが残った」と述べ、不満は4名(5.6%)で、「相手のデメリットに対し、深まった討論が聞きたかった」「ディベーターシップとして誤っている場面があった」とディベート術への意見が述べられていた。

##### 3. ディベートの受けとめ方（表2）

今回のディベートに対し、成功したと答えた学生は、強くそう思う、そう思うで67名(93.1%)であった。その理由としては、「交互討論ができていた」「討論者同士が、よく話し合っていた」「進行がスムーズであった」「主張したいことがよく理解できた」で、そう思わなかった学生は、「(討論するには)討論者が勉強不足と感じた」「グループ内の知識の差があり、ディベート感が弱かった」と述べた。また参加したいかについては、強くそう思うと思うを合わせ55名(76.4%)で、その理由は「一つのことをより深く考えられ、対応力がつく」「考えを伝える授業は必要である」「積極的に参加できる」「相手の意見への答えの時に強力で頭を使う、普通の授業では得られない」、そう思わない理由としては「参加者以外はあまり集中できない」「勉強をしてきている人が偏っている」と述べた。このような授業形態は講義の中に取り入れた方がよいかについては、強くそう思うとそう思うを合わせて60名(83.3%)であり、その理由を「自分で学習することで知識が残る」「論理良く話す方法を学

表2. ディベートの受け止め方

	n (%)		
	強くそう思う	そう思う	思わない
成功した	12(16.7)	55(76.4)	5(6.9)
講義へ取り入れた方がよい	7(9.7)	53(73.6)	12(16.7)
また参加したい	5(6.9)	50(69.5)	17(23.6)

べる」「人の意見を聴く力や発言する力が養える」「緊張感の中で集中できる」と述べた。そう思わない理由としては、「人前で喋ると緊張もあり、根拠とか深い意見が出にくい」「討論者になる人とならない人の参加割合に差が出てくる」と述べた。

## V. 考察

### 1. ディベートの準備性

ディベートの進行スケジュールは、論題の決定、資料・データの収集と分析、論理の構築、ディベート討論会、の一連の流れがあると言われている<sup>7)</sup>。ディベート討論会の成功の有無は、資料・データの収集力が大きく影響してくる。今回、学生は平均2.3 (SD1.6) 時間の自習学習時間で、前回中尾らが行った調査<sup>6)</sup>の3.3時間 (SD1.4) に比較し、明らかに少なかった。背景には、課題が重なっていたこと、テーマの表示から発表までが2週間と準備時間がとれなかったことが予想される。学生へのテーマの伝達 (論題の決定) は、1か月以上前から行い、学習時間が自主的・計画的に組み立てられるような配慮が必要である。また、資料・データの収集と分析方法が効率よく行われているか自主レポートの確認を行い、ディベートの準備性を高めていく必要があることが明らかとなった。

### 2. ディベートの受けとめ方

ディベートをほとんどの学生が、成功と感じていた。その理由としては、能動的体験やディベートとして成立していたことが大きな理由であったが、そう思わなかった学生はディベートとしての深まりのなさについて満足していなかった。また、討論に参加できなかったことで物足りなさを感じていた学生もいた。今回のディベートは、参加学生76名中、司会者1名、代表討論者10名、メイン審査員5名の16名が主であったが、その他の学生60名は一般審査員としての参加であったため、受講の達成感が低かった学生がいたと考えられる。しかし、ディベートを講義の中に取り入れることを8割以上の学生が希望していることも含めると少人数制のディベートを取り入れ、議論の素地を固めていくことが優先されると考えられる。煙山もディベートの課題として、多人数の面前での発言に抵抗のある学生への配慮の必要性を述べており、少人数、短時間、数回の実施の工夫をあげている<sup>8)</sup>。全体ディベートの討論代表者として立候補する学生が増えるよう、積極的に専門科目でも少人数制ディベートの体験を積み重ねていくことが重要であると考えられた。

## VI. 結論

今回の母性看護学によるディベート学習は、形式としての成立や能動的体験により、学生の大部分がディベートを成功したと感じ、満足感を得ていた。改善策として、少人数制のディベート方法の実施や準備性の工夫が必要であることが明らかとなった。

## 文献

- 1) 松本茂, 河野哲也: ディベートとは何か, 大学生の「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法, 玉川大学出版社, 東京, 2015, p110-112
- 2) 北岡俊明: 意思決定能力の時代, 意思決定ディベートの技術 - ディベートが組織を活性化する -, 中央経済社, 東京, 1995, p1-11
- 3) <https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd26.html>  
鹿児島大学ホームページ January 11 2016
- 4) <https://www.kagoshima-u.ac.jp/topics/2015/07/post-885.html>  
鹿児島大学ホームページ December 20 2015
- 5) 宮里智子, 伊良波理恵, 高橋幸子他: 日本国内の看護基礎教育におけるディベートの取り組みに関する文献検討 - 取り組みの実際と教育効果および課題 -. 沖縄県立看護大学紀要2013. 14: 81-88,
- 6) 中尾優子, 森藤香奈子, 荒木美幸, 他: 小児看護学におけるディベート学習の導入とその評価. 保健学研究2014; 26: 47-51
- 7) 北岡俊明: ディベートの進め方, ディベート入門, 日本経済新聞社, 東京, 1999, p53-57
- 8) 煙山晶子, 小笠原サキ子: 老年看護学における教育方法の検討 - ディベートの教育効果について -. 秋田大学医学部保健学科紀要2005; 13(2); 50-57

# **An attempt of incorporating a debate course into the maternity nursing class and its evaluation -A self-administered questionnaire survey by Students-**

Yuko Nakao<sup>1)</sup>, Atsuko Yoshidome<sup>1)</sup>, Naomi Inoue<sup>1)</sup>, Kumiko Takada<sup>1)</sup>, Toshinori Fujino<sup>1)</sup>, Mikiyo Wakamatu<sup>1)</sup>

1) Department of Maternal & Child Nursing, School of Health Sciences,  
Faculty of Medicine, Kagoshima University,

Address correspondence to: Yuko Nakao  
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan  
Tel&Fax: 099-275-6350  
E-mail: ynakao@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

## **Abstract**

An attempt of introducing a debate course by students on a topic regarding breast-feeding into the maternity nursing class was made. A whole class consisting of 76 students participated in the debate. After the debate an evaluation questionnaire was completed by the students. Most students replied that the debate was successful and more than 80 percent agreed on the incorporating of the debate course into the class. As a background for the acceptance by the students, they may have felt that the debate was a real debate in some way and they may have been satisfied with the fact that they could participate in it actively. To make the debate more fruitful, it was suggested that the students take more time preparing for the debate in advance and that in addition to the whole-class debate, other types of debate, such as a debate by a smaller number of students have to be adopted.

**Key words:** Debate, Maternity nursing, Active learning, Breastfeeding